The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	カンバルポーシュの旅行記について
Author(s)	松村, 耕光
Citation	言語文化研究. 2017, 43, p. 157-172
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61292
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

カンバルポーシュの旅行記について

松　村　耕　光

The Travelogue of Kambalpōsh

MATSUMURA Takamitsu

Summary: The travelogue of Kambalpōsh was published in 1847 in Delhi under the title of *Tārīkh-e Yūsufī* (The Accounts of Yusuf), and republished in 1873 in Lucknow under the new title of *'Ajā'ibāt-e Farang* (The Wonders of Europe). It is said that this is the first minute and informative travelogue of Europe written in Urdu. In this travelogue, the prose style of which is very vivid and straightforward, Kambalpōsh gave a detailed description of his observations, impressions and reflections. This travelogue is undoubtedly significant as a representative work of Urdu prose of the nineteenth century and as a valuable source of information about Britain, France, Egypt, India and other places. It deserves to be treated as an object of religious and cultural studies as well, because it contains Kambalpōsh's rationalist interpretation of religion, severe criticism on avaricious religious leaders, and great admiration for generous British people and its welfare system.

キーワード：ウルドゥー旅行記，カンバルポーシュ，イギリス礼賛

はじめに

本稿で紹介・検討するのは，19世紀半ばに著された，ハイダラーバード（デカン）出身のインド・ムスリム，ユースフ・ハーン・カンバルポーシュ（Yūsuf Khāṅ Kambalpōsh）の西洋旅行記である[1)]。インド・ムスリムは18世紀から西洋旅行記を著しているが，いずれもペルシア語で書かれている[2)]。カンバルポーシュの旅行記は，ウルドゥー語で書かれた最初の本格的な西洋旅

1）後に触れるように，カンバルポーシュは，自分は「ソロモンの教え（madhhab-e Sulaimānī）」を信奉していると本書で記しているが，唯一神の信仰を持ち，ムハンマドを神の預言者と考えているので，イスラーム信仰の枠内にいたと考えられる。

2）以下のようなペルシア語で書かれた西洋旅行記が知られている。

（1）　*Tārīkh-e Jadīd*

東インド会社のムンシー（munshī ペルシア語書記官）として1771年に渡英し，1773年に帰国した，ベンガル出身のイスマーイール（Ismā'īl b.1734）の旅行記。1773年に完成したと考えられている。本書に関しては，本書を初めて紹介したSimon Digbyの次の論文を参照。Simon Digby, "An eighteenth century narrative of a journey from Bengal

行記と言われている[3)]。

著者カンバルポーシュに関する情報は多くない。彼が旅行記に記しているところによると，1828年，故郷ハイダラーバードを出て，アズィーマーバード（パトナ），ダッカ，ゴーラクプル，アクバラーバード（アーグラー），シャージャハーナーバード（デリー）等インド各地を巡り，ラクナウーでイギリス人将校の口利きでアワド（Awadh）藩王ナースィルッディーン・ハイダル（Nāṣir al-Dīn Ḥaidar r. 1827–1837）の軍隊の将校となったという。カンバルポーシュが外国，特にイギリスを見たいと思い，休暇をとってイギリスに渡航したのは1837年のことで[4)]，3月30日にインドを出発し，1838年4月下旬にインドに帰着している。帰国後はラクナウーに戻って軍務に復帰したが，その後については情報がない。ギャルサン・ド・タッスィー（Garcin de Tassy）が1861年に行った講演によれば，1861年8月10日にラクナウーで死去したようである[5)]。チュグターイーによれば，カンバルポーシュは最初ペルシア語で1843年に旅行記を執筆したが，出版には至らなかった[6)]。ウルドゥー語版のカンバルポーシュの旅行記は，1847年，*Tārīkh-e*

---

to England: Munshi Ismā‘īl’s *New History*”, in Christopher Shackle, ed., *Urdu and Muslim South Asia: Studies in Honour of Ralph Russell,* London, 1989. 英訳はないが，Jawād Hamdānī によるウルドゥー語訳が，次のウルドゥー語論文に付加されている。Najībah ‘Ārif, “Janūbī Ēshiyā mēṅ awwalīn safar-nāmah-e Inglistān: *Tārīkh-e Jadīd*”, *Bunyād*, vol. 5, 2014.

（2） *Shigraf-nāmah-e Vilāyat*

デリー帰還援助をイギリス国王ジョージ3世に請うため，ムガル皇帝シャー・アーラム（Shāh ‘Ālam）2世によってイギリスに派遣されたベンガル出身のムンシー，エーテサームッディーン（I‘tiṣām al-Dīn 1730–1800）の旅行記。1792年頃完成したようである。旅行期間は，1766年から1768年まで（1765年から1768年まで，或いは，1766年から1769年までとする説もある）。英訳がある。James Edward Alexander, tr., *Travels of Mirza Itesa Modeen in Great Britain and France*, London, 1827.

（3） *Masīr-e Ṭālibī fī Bilād-e Afrangī*

息子を失った悲しみを忘れるため，イギリス人の友人の勧めで渡英した，ラクナウー出身の高級行政官ミールザー・アブー・ターリブ・ハーン（Mīrzā Abū Ṭālib Khāṅ 1752–1806）の旅行記。旅行期間は，1799年から1803年まで。旅行記は1804年頃完成し，1810年に英訳が出版された。Charles Stewart, tr., *The Travels of Mirza Abu Taleb Khan in Asia, Africa and Europe during the Years 1799, 1800, 1801, 1802 and 1803*, London, 1810.

18世紀にインド・ムスリムによって書かれた西洋旅行記に関しては，グルフィシャーン・ハーンの次の書を参照。Gulfishan Khan, *Indian Muslim Perceptions of the West during the Eighteenth Century*, Karachi, 1998.

3）カンバルポーシュの旅行記以前に，ジャッジャル（Jhajjar）藩王国出身のナワーブ・カリーム・ハーン（Nawāb Karīm Khāṅ 生没年不明）がイギリス旅行記（1840年から1841年までイギリスに滞在）をウルドゥー語で執筆していたと思われるが―帰国時にパリでウルドゥー文学研究者 Garcin de Tassy に本書の手書き原稿を渡している―，きわめて簡素簡潔な日記で，出版されたのは1982年である（‘Ibādat Barēlvī, ed., *Siyāḥat-nāmah*, Lahore, 1982）。

カンバルポーシュの旅行記及びナワーブ・カリーム・ハーンの日記に関しては，簡単な紹介論文がある。Michael H. Fisher, “Britain in the Urdu Tongue: Accounts by Early Nineteenth-Century Visitors”, in Kathryn Hansen & David Lelyveld, eds., *A Wilderness of Possibilities: Urdu Studies in Transnational Perspective*, New Delhi, 2005.

ウルドゥー語で書かれた旅行記に関しては，以下のような研究書がある。

Qudsiyah Quraishī, *Urdū Safar-nāmē Unnīswīṅ Ṣadī mēṅ*, Delhi, 1987.

Anwar Sadīd, *Urdū Adab mēṅ Safar-nāmah*, Lahore, 1988.

Mirzā Ḥāmid Bēg, *Urdū Safar-nāmē kī Mukhtaṣar Tārīkh*, Lahore, 1999［初版：Islamabad, 1987］

Bushrā Raḥmān, *Urdū kē Ghair-madhhabī Safar-nāmē*, Gorakhpur, 1999.

Khālid Maḥmūd, *Urdū Safar-nāmōṅ kā Tanqīdī Muṭāla‘ah*, New Delhi, 2011.

4）カンバルポーシュは旅行を思い立った理由を次のように述べている。

「突如，英語の知識を得たいという思いにとらわれ，大いに努力して短期間のうちにそれを習得した。その後，多くの歴史の本を渉猟し，街の様子や外国の慣習を知って興味深く思った。1836年，突然，私は外国に，特にイギリスに行ってみたいと思った。」（Muḥammad Ikrām Chughtā’ī, ed, *Tārīkh-e Yūsufī (‘Ajā’ibāt-e Farang)*, Lahore, 2004, p. 53）

5）Garcin de Tassy, *Khuṭbāt-e Garcin de Tassy*, vol. 1, Karachi, 1979, pp. 305–306. この講演では，カンバルポーシュはカトリックのイタリア人であった，と述べられており，講演内容はあまり信用できない。

6）Muḥammad Ikrām Chughtā‘ī, *Tārīkh-e Yūsufī (‘Ajā’ibāt-e Farang)*, Lahore, 2004, p. 11. コルカタの Asiatic Society of Bengal に手稿があるということであるが，未確認である。Wladimir Ivanow, *Concise Descriptive Catalogue of the Persian Manuscripts in the Collection of the Asiatic Society of Bengal*, Calcutta, 1985の Geography and travels の部分に Yūsuf Khān Galīm Pūsh という人物が書いた *Ta’rīkh-i-Yūsufī* という題名の手稿本が挙げられており，“An account of a journey from India to Europe,

Yūsufī（ユースフ自伝）の題名でデリー翻訳協会[7]から，デリー・カレッジの印刷所 Maṭba‘ al-‘Ulūm より出版され，1849年12月から1850年4月にかけて，デリー・カレッジ数学教授ラームチャンドラ（Rām Chandra 1821–1888）が刊行していた啓蒙雑誌 *Muḥibb-e Hind*（インドの愛国者）[8]に，旅行記全297頁中最初の147頁が掲載された[9]。カンバルポーシュ以外の人間がペルシア語からウルドゥー語に翻訳したとは何処にも記されていないので，カンバルポーシュ本人がウルドゥー語版を作成したのではないかと思われる。

本書は，1873年9月，*‘Ajā’ibāt-e Farang*（西洋の驚異）という題名で，ラクナウーの，カンバルポーシュの知人で，出版業者であったナワル・キショール（Nawal Kishōr 1836–1895）によって出版され[10]，現在ではこの題名で一般に知られている[11]。

カンバルポーシュの旅行記は，1837年から1838年にかけての旅行が旅程順に記述された旅行・滞在記録である。日付や発着地の地名がかなり明瞭に示されているので，カンバルポーシュの旅や滞在の様子をかなり具体的に把握することができる。彼の記述によっておおよその旅程を示すと以下のようになる。

1837年

3月30日：カルカッタ出発

6月17日：ケープタウン近郊のサイモンズ・ベイ到着

---

with special descriptions of England”, “Comp. in 1259/1843”, “He started his journey from Ḥaydarābād in（1244)/1828” という記述があるので，カンバルポーシュの旅行記であろうと思われる。galīm と kambal は同じ意味（「毛の外衣」,「毛布」）であるので，ペルシア語で旅行記を書いていた時にはガリームポーシュと名乗り，ウルドゥー語版を作成するときに galīm をインド系の同意味の単語 kambal に変えたのかもしれない（「纏う者」という意味のペルシア語の単語 pūsh はウルドゥー語では pōsh と発音される）。

7）デリー翻訳協会（The Society for the Promotion of Knowledge in India through the Medium of Vernacular Language）は，デリー・カレッジ校長 Felix Boutros によって1843年，英語，アラビア語，サンスクリット，ペルシア語の有益な著作をウルドゥー語，ベンガル語，ヒンディー語に翻訳することを目的として設立された組織である（アブドゥル・ハックによれば，結局，ウルドゥー語にのみ翻訳されたということである。‘Abdul Ḥaqq, *Marḥūm Delhi College*, Delhi, 1989, New Delhi［初版 Delhi, 1945］, p.140）。

8）*Muḥibb-e Hind* は，1847年にラームチャンドラによって刊行された。創刊時（9月1日）には *Khair-Khwāh-e Hind*（インドの友）という題名であったが，同名の雑誌が既にあったため，11月に *Muḥibb-e Hind* と改称された。

9）カンバルポーシュの旅行記は *Muḥibb-e Hind* の28号（1849年12月），30号，31号，32号（1850年2月，3月，4月）に掲載された（Chughtā’ī, *op. cit.*, pp.16–17）。

10）1898年に再発行されている。Rosie Llewellyn-Jones に拠れば，1873年版と同じ頁表示が行われているということである（Rosie Llewellyn-Jones, *Engaging Scoundrels: True Tales of Old Lucknow*, New Delhi, 2000, p.99）。

11）インドを含む，西洋以外の地域に関する記述が過半数を占めているので，内容に即した題名とは言えない。
現在，以下の4種類のテキストを比較的容易に入手することができる。
（1） Muẓaffar ‘Abbās, ed., *Urdū kā Awwalīn Safar-nāmah ‘Ajā’ibāt-e Farang*, Lahore, 1982.
（2） Taḥsīn Firāqī, ed., *‘Ajā’ibāt-e Farang*, Lahore, 1983.
（3） Muḥammad Ikrām Chughtā’ī, ed, *Tārīkh-e Yūsufī（‘Ajā’ibāt-e Farang)*, Lahore, 2004.
（4） Maẓhar Aḥmad, ed, *Tārīkh-e Yūsufī al-ma‘rūf bah ‘Ajā’ibāt-e Farang*, New Delhi, 2012.
（1），（2），（4）は Nawal Kishor Press より1873年に出版されたテキストに基づき，（3）は1847年，Maṭba‘ al-‘Ulūm より出版されたテキストに基づいている。（4）は，（2）と（3）とのテキストの異同に言及している。いずれも綴りが現代のものに変更されたり，段落に分けられたり，小見出しが付けられたりと何らかの形で編集の手が加えられている。（3）には1847年版の複写が付録として収録されている。本稿では（3）のコンピューター文字で転記された転記版を基本テキストとして用いることにする（引用文中の丸括弧内は引用者の註記である）。1898年に再発行されたナワル・キショール版に基づく英訳も出版されている（Mushirul Hasan and Nishat Zaidi, tr., *Between Worlds: The Travels of Yusuf Khan Kambalposh*, New Delhi, 2014）。

6月23日：サイモンズ・ベイ出発

8月31日：イギリス到着[12)]

9月 1日：ロンドン到着

11月26日：フランスに向けて出発

11月27日：ブーローニュ・シュル・メール到着

12月 1日：パリ到着

12月25日までにロンドンに戻る

1838年

1月18日：ロンドン出発[13)]

1月27日：スペインのビーゴ（Vigo）に寄港後リスボン到着

（リスボン出発日，記載なし）

1月31日：ジブラルタル到着

2月 3日：ジブラルタル出発

2月 8日：マルタ到着

（マルタ出発日，記載なし）

2月13日：アレクサンドリア到着

2月15日：アレクサンドリア出発

2月19日：ムハンマディー到着[14)]

（ムハンマディー出発日，記載なし）

2月18日：カイロ到着

2月29日[15)]：カイロ出発

3月 3日頃：スエズ到着

3月30日：スエズ出発

4月下旬[16)]：ボンベイ到着

4月27日：ボンベイ出発

プネー，アウランガーバード，ナーグプル，ジャバルプルを経てベナレスに赴く（ベナレス到着日，記載なし）

7月 5日：ベナレス出発

7月25日：カルカッタ到着

12）ロンドンから150コース（kōs）の地点（1コースは約2マイル）。到着地名は記されていない。

13）ロンドンから24コース離れた地点で乗船（乗船地は判読できない）。

14）Muḥammadī と表記されている。Al-Maḥmūdīyah の誤記。

15）1838年は平年なので，この日付は誤りである。

16）4月22日にエレファンタ島を観光しているので，ボンベイ到着は20日前後か。

9月7日：カルカッタ出発，パトナ，ベナレスを経由してラクナウーへ（ラクナウー到着日，記載なし）

カンバルポーシュは行く先々の街や人の様子のみならず，自分の行動についても詳しく記録している。それは淡々とした，単調な事実の羅列ではなく，カンバルポーシュという人物の存在を身近に感じさせるような，臨場感あふれる，生き生きとした筆致で書かれている[17)]。これが彼の旅行記の大きな特徴であり，また魅力であろうと思われる。例えば，鉄道を見たときの感動を彼は次のように描写している[18)]。

「線路を見た。魚の背のように中央が盛り上がり，地面の両側に鉄が敷かれていた。汽車の車輪が上下しないようにするためであり，小石の衝撃を避けるためである。7，8両の車両が停まっていた。先頭には大きな車両があり，乗務員3人が石炭を焚いていた。各車両は鎖で繋がれていて，大きな車両に連結されていた。客が皆乗り込むと，大きな車両に付いているバルブを回す。すると蒸気の力で矢のように動き出す。各車両は鎖に引っ張られて動き出す。そのような光景は見たことがなかった。興味津々となり，運転士に『何処に行くのか』と尋ねた。運転士は答えた，『8コース先まで』。私は言った，『私も乗せてほしい』。運転士は言った，『構わんよ』。私は乗り込んだ。運転士はバルブを回した。即座に動き出した。胸が躍った。途中，一度頭を外に出してみた。あまりに速く走るのでターバンが脱げそうになった。すぐに頭を引っ込めた。15分で8コース進んだ。そこから汽船に乗ってグリニッジ見物に出かけた。」（p.65）

下宿の台所を浴室と間違えてしまったという失敗談も，彼は次のように，その場の光景が目に浮かぶように活写している。

「朝，家の中を見て回った。台所に小さな水槽があり，上部に曲がった管が付いていた。私は当地のことを全く知らなかった。台所を浴室と思い，沐浴し始めた。栓を開いた。私の召使が私の体をこすった[19)]。しばらくすると水が部屋に溢れた。驚いて女主人が侍女と一緒に走ってきた。私が沐浴しているのを見て，大笑いして立ち去った。私の召使も私も何故彼女たちが大笑いしたのか解らなかった。ここには沐浴の習慣がないので沐浴しているのを見て笑

17）カンバルポーシュは，脚韻や比喩表現も用いているが，平易で，生き生きしたウルドゥー語が随所で用いられている。ウルドゥー語で書かれた旅行記を散文史の観点からウルドゥー文学史の中に位置づけることが今後，必要であろうと思われる。

18）カンバルポーシュが利用したのは，The London and Greenwich Railwayであろう。カンバルポーシュのロンドン滞在時には，Greenwich駅はまだできておらず，汽車はLondon Bridge，Deptford間で運行されていた。

19）カンバルポーシュは召使を一人インドから連れてきていた。

ったのであろうと思った。沐浴し終えると朝食を頼んだ。女主人の侍女が現れた。『私が沐浴しているのを見て，どうしてあなたとあなたのご主人は笑ったのか』と尋ねた。すると彼女はまた大笑いした。私は再度尋ねた。すると彼女は答えた。『あなたが沐浴したところは台所です。浴室ではありません。台所と浴室の区別がつかないあなたを見て笑ったのです。』これを聞いて恥じ入ってしまい，何も答えることができなかった。」(p.66)

カンバルポーシュの旅行記には，旅先での感慨や思索も詳しく，また，率直に記されている[20]。特に興味深いのは，カンバルポーシュの旅行記に頻出する，彼の宗教論や西洋・インド観が記述された部分である。以下にそれらについて検討してみることにしよう。

カンバルポーシュの宗教論

(1) 宗教の合理的解釈

カンバルポーシュの旅行記には，イギリス人の家に招かれたカンバルポーシュが，同席しているイギリス人キリスト教聖職者[21]やイギリス人婦人と宗教問答を始める箇所がある。その中で，ヒンドゥーの偶像崇拝を批判するイギリス人キリスト教聖職者に対してカンバルポーシュは，「恋人の許に行けない者，それでも恋人を見たいと思っている者は仕方なく恋人の絵を置き，心を慰めるのです。ヒンドゥーもこのような理由で偶像を置いているのです。それを神だとは思っていません。神は唯一だと言っているのです」(p.77) とヒンドゥーを擁護し，ヒンドゥーが牛や樹木を崇拝する理由を以下のように述べている。

「私は答えた。『ヒンドゥー教を始めた者は賢明でした。インドは炎暑の国です。旅人は暑熱に苦しめられます。道中に樹木があればその陰で休めます。もしヒンドゥー教を始めた者が樹木の崇拝を命じていなければ，人々は樹木を根から切り，旅人や動物は木陰がないので大いに苦しみ，瀕死の状態になっていたでしょう。命令にも関わらず，今でも樹木は切り倒されています。人々は理解していないのです。もしこの信仰がなければ，どうなっていたで

20) カンバルポーシュは，本書の中で，「預言者様は葡萄の汁（sīrah 酒という意味もある）を禁止されなかった」(p.60) と飲酒を肯定し，「ヨーロッパは美女の国である。みな輝く月を嫉妬させるほど美しく，ヨーロッパに来た者は故国を忘れてしまう」(p.99 チュグターイーの転記版では「輝く月を嫉妬させるほど」の部分 ghairat-e mihr-e darakhshān が，ghairat-e qahr-e darakhshāṅ と誤転記されている)，「井戸に水を汲みに来るヒンドゥー女性はとても美しく，絹のラハンガー（lahaṅgā ロングスカートのような衣服）を着て，チャンチャンと装身具の音をさせて現れ，見る者の心を奪っていた。ボンベイの美女ほど美しい女性はインドにはいない」(p.139 ファールーキー版では「とても美しく，絹のラハンガーを着て，チャンチャンと装身具の音をさせて現れ」の部分が抜けている。アッバース版では，「ヒンドゥー女性（‘auratēṅ hindū’ōṅ kī）」が「インド女性（‘auratēṅ hindūstān kī）」になっている)，などと外国やインドの女性を観察し，美女に魅了されたことを隠そうとはしていない。このような率直さもカンバルポーシュの旅行記の大きな特徴であり，面白さである。本書には，複数のヒンドゥー行者と女性信者たちとの深夜の乱行や白人男女の密通を目撃したことまで記述されている。

21) 本書ではキリスト教指導者に対して，pādrī という単語が使われている。宗派が明示されていないので，本稿では「キリスト教聖職者」と訳しておく。

しょうか。樹木は一本も残っていなかったでしょう。牛の崇拝も同様です。インドでは大抵の作業は牛に頼っています。耕作，灌漑などです。車も引かせています。もし牛崇拝の教えがなければ，一頭も残っていなかったでしょう。すべて食べられてしまい，作業に支障が生じていたことでしょう。みな，便宜を図るためです。神の唯一性とは関係がありません。愚か者が牛を神と思っても，それは愚かしい行為であるに過ぎません。毎日沐浴すること，容器を土で洗浄すること，炊事場を清浄にすること，飲酒しないこと，肉食しないこと，これらは無益なことではありません。インドは炎暑の国だからです。もし沐浴しなければ病気になってしまうでしょう。酒や肉を口にすれば血が濃くなって命が危くなってしまいます。以上のことは皆，利益になることであって，宗教とは関係がありません。しかし，ヒンドゥー教の開教者は賢明にもこれらのことを信仰の中に取り入れました。そうすればそれらを実行せざるを得ないからです。』」（pp.78）

イスラームの一夫多妻制に対し，「1人の男性が4人の女性の必要を満たし，4人の女性の世話をするなどというのは明らかに理性に反していると思えます」（p.80）と疑問を呈したイギリス婦人に，カンバルポーシュはこう答えている。

「私は答えた。『イスラームが興った頃，預言者ムハンマドを信じる者は多くありませんでした。異教徒たちは敵と見做して攻撃を加えました。殉教する者が現れ，信者の数はさらに減りました。そこで預言者ムハンマドは4人の妻を持つことをお認めになったのです。それで男の子たちがたくさん生まれたのです。ムスリムの集団は大きくなり，イスラームは発展したのです。」（p.80）

以上の言葉に続けて，カンバルポーシュはイスラームを次のように擁護している。

「預言者ムハンマドは豚肉を食べること，酒を飲むことを禁止されましたが，それにも大変良い点がありました。アラビアは暑く，アラブ人は無知蒙昧でした。豚肉を食べ，酒を飲んでいたら，酔って殺しあっていたでしょうし，様々な病気にも罹っていたでしょう。豚の飼育は難しいことではありません。餌の心配をしなくてもいいのです。豚は勝手に餌を探して食べます。アラブの者たちはそれをよいことに，神への信仰を忘れてしまったことでしょう。素晴らしいことではありませんか，解脱の道があり，5回の礼拝と沐浴の命令があるのは。何の問題があるでしょうか。かつてのアラブは無知ゆえに偶像を崇拝していました。今は熱心に5回の礼拝を行い，神を念じています。沐浴は体を清潔にし，体を健康に保ちます。動物を失血死させるのにも大きな利点があります。血液の過剰は，あなたもご存知のように，病気や狂気の原因になります。ですから失血させて屠殺し，健康的な肉を食べるのです。イ

スラームのどこに非難されるべき点があるでしょうか。(…) 私はさらにキリスト教聖職者に言った。『ムスリムは割礼を行います。これも清潔さをもたらす風習であって，嫌悪すべき風習ではありません。』」(pp.80-81)

以上のようにカンバルポーシュは宗教の教えを合理的に解釈しているが，すべてが合理的に解釈できるとは考えていなかった。スエズに上陸したとき，カンバルポーシュは次のように記述している。

「私は現地を見て（モーセにまつわる）これらすべての話を信じた。神の力によって有り得ることであると思った[22]。しかし，あまり知的ではない一部のイギリス人はこれらの話は嘘だと考えてこう言っている。『モーセはどのように海を渡ったのであろうか。たとえ水がなかったとしても，サンゴの枝はどのようにして道から片づけられたのであろうか。』このように彼らはすべては物語であると考え，真実であるとは思っていない。彼らの無知が憐れでならない。生活する術も知らないのに，神の力や預言者たちの奇跡をどうして否定するのであろうか。わざわざ誤った道を彷徨っているのである。神の力は理性では捉えられない。その秘密を知る力が理性にあるであろうか。」(pp.131-132)

著名な評論家ムハンマド・ハサン・アスカリーは，啓示に頼らなくても，人間だけに等しく与えられた理性によって神を知ることができ，あらゆる宗教に共通な教義を理性によってまとめたものが真の宗教であると考える理神論（khudā-shināsī）という思想が18世紀に生まれたと述べ[23]，「1836年にカンバルポーシュは西洋を旅行し，10年後に旅行記を著したが，それを読むと，西洋に行く前から『理神論』の影響を受けていたように思われる。それを彼は『ソロモンの教え』と呼んだのである」と記しているが[24]，カンバルポーシュを理神論者と言うことはできないように思われる。

(2) 激しい似非宗教者批判

カンバルポーシュは，激しい似非宗教者批判を行っている。「私は何人ものヒンドゥー行者を見た。木にさかさまにぶら下がっている者，酷暑の中，火の中に坐る者。また，礼拝に耽るイスラームの行者も見た[25]。調べてみると，皆，欺瞞に満ちていることが解った」(pp.150-151) と，

22) 「私は現地を見て，（モーセにまつわる）これらすべての話を信じた。神の力によって有り得ることであると思った」の部分が，フィラーキー版では脱落している。

23) Muḥammad Ḥasan ʻAskarī, *Jadīdiyat yā Maghribī Gum-rāhiyōṅ kī Tārīkh kā Khākah*, in *Majumūʻah-e Muḥammad Ḥasan ʻAskarī,* Lahore, p.1205.

24) *ibid*., p.1206.

25) 「礼拝に耽る（ʻibādat mēṅ gharq）」の部分が，転記版では ʻibādat mēṅ farq と誤記されている。

カンバルポーシュはヒンドゥーやムスリムの行者を批判するとともに，以下のように，キリスト教聖職者にも厳しい批判の目を向けている。

「『キリスト教聖職者たちは富に夢中です。奥方たちと馬車に乗り，旅をします。従者が常に控えています。神の道にはビタ一文使わず，貧しい者たちにもほとんど無関心で，空腹な者にも食べ物を与えません。説教を垂れますが，実践することはありません。腹を空かせた者がパンをくれと言っても，ただ説教するだけです。宗教心があると言えるでしょうか。（…）私が会ったキリスト教聖職者は大抵太っていました。礼拝と修行に勤しんでいたらそのように太ることはなかったでしょう。』」（p.79）

（3） ソロモンの教え（madhhab-e Sulaimānī）

カンバルポーシュは，彼が「ソロモンの教え」と呼ぶ，独自の宗教信条を持っていた。

イギリス人のキリスト教聖職者に「あなたの宗教は何か」と聞かれ，カンバルポーシュは次のように答えている。

「私は言った。『12歳の頃から日夜それを探し求めていますが，世俗的欲望を持たないような（宗教）者をどの宗教にも見たことがありません。説教壇に上がって説教する偉い人たちの許に長くいましたが[26]，世俗的欲望から脱していないことに気付きました。何年もバラモンやヒンドゥー行者に仕えました，彼らのことを理解する手がかりが得られるようにと[27]。木に足を縛り付けてぶら下がる行者や暑い盛りに火にあたる行者もいましたが，欺瞞以外の何物でもありませんでした。キリスト教聖職者たちの許にも随分いましたが，イエスの教えにも関わらず，金銭欲に囚われていました。そこで仕方なくソロモンの教えを信じることにしたのです。これが最高の教えだと思ったのです。ソロモンはこう言いました―イスラエルの民の中に私のような者はいない[28]。神は世界のすべての恵みを，感謝しきれない程私に与えられた，と。しばらくして，その特別な意味を理解しました[29]。幸いな人間とはまっとうに暮らす人間であり，自分が食べる分以外は貧しい者に与える人間である，と。』」（p.81）

別の個所では，「神の道のために金を使い，貧者の救済を気にかけ，人を苦しめない者―その

26）フィラーキー版，アッバース版，アフマド版には，「説教壇に上がって説教する」の次に「そして涙を流す」とある。

27）フィラーキー版，アッバース版，アフマド版では，「彼らのことを理解する手がかり（un kā patā）」は「正しい道の手がかり（rāh-e rāst kā patā）」（複写ではこの部分が欠落している）。

28）原文は，Banī Isrā’īl mēṅ mujh sē kō’ī nahīṅ huā。この原文が正しいとすると，「イスラエルの民の中に私から生まれた者は一人もいない」という意味になるが，次の文と繋がらなくなるので，mujh sā を mujh sē と書き誤ったのではないかと思われる（複写ではこの箇所欠落）。フィラーキー版では，「私のような王はいなかった（mujh sā bādshāh nahīṅ huā）」。アッバース版，マズハル版では，「私のような王は一人もいなかった（mujh sā bādshāh kō’ī nahīṅ huā）」。

29）フィラーキー版，アッバース版，アフマド版では，「特別な意味（khāṣ maṭlab）」の部分が「言葉の要諦（khulāṣah-e maṭlab）」となっている（複写ではこの部分欠落）。

ような者こそ，どの宗教を信じていようと，神に嘉された者なのである」（p.102）と述べており，カンバルポーシュにとって，他者を苦しめず，他者を助けることが宗教の最も重要な本質であったと思われる[30]。

カンバルポーシュは，当時としては珍しくパルダ（pardah 男女隔離）制に反対しているが，これもパルダ制が女性を不当に苦しめる制度に思われたからであろう。彼はこう述べている。

「男性は皆このパルダを婦人の貞潔さの源と考えている。実際にはそれは学芸を学ぶことを妨げており，パルダを貞潔の源と考えることは誤りである。生れつき貞潔な女性は，たとえ何千という悪い[31]男性たちに囲まれていても貞潔を守る。不貞な女性は，どれほど隔離しようとその不品行を改めることはない。ロンドンの未婚の美しい女性は見知らぬ男性たちと馬車でどこに行こうと，問題を起こさない。何故なら男性は善良だからであり，女性は貞潔だからである。不道徳なことを行おうと思ったりするであろうか。パルダには多くの問題点がある。結局，それは恥辱をもたらすのである。インドの女性が知識を持っていれば，ベールなしで外出しても何の問題も起きないであろう。パルダに何の益があるであろうか。男性は，愚かにも，女性を鳥籠のような狭い家に閉じ込めて女性を世界の驚嘆すべき光景から遠ざけているのである。自分は外の光景を見て歩くのに，自分の仲間，すなわち女性にはそれを許さないとは，何ということであろうか。」（pp.178–179）

カンバルポーシュの西洋・インド観

カンバルポーシュは，ロンドン到着時のロンドンの街の印象を次のように記している。

「夜更けにロンドンの街に達した。変わった道路であった。石でできており，中央に動物用の道があった。そこを人間が通ることは王命により禁止されていた。どこでも両側に 4 ガズ（gaz）[32]，3 ガズの人が歩く道があった。通行人専用であるため，それは清潔であった。両側の鉄の支柱にガス灯が輝き，星々を恥じ入らせていた。両側に並ぶ建物は美しく，まるで向かい合う，どっしりと構えた戦列のようであった。どの建物も同じ高さで，道を行き交う男女は，天国の天女と美青年のようであった。道や（人々の）美しさ，この街の雰囲気は，まるで幻想の世界のようであった。」（pp.63–64）

30）註 1 で記したように，カンバルポーシュはイスラーム信仰の枠内にいたと考えられるが，飲酒していることを隠さず，イスラーム法上合法な食べ物しか口にしないと断ってもいない。また，日常的な礼拝の実践にも言及がないので，自由人として振舞っていたのではないかと思われる。

31）フィラーキー版では，「悪い」が脱落。

32）1 ガズ（gaz）は約 33 インチ。

カンバルポーシュは，ロンドンの街の清潔さ，ガス灯の明るさ，街並みや道行く人たちの美しさにまず目を奪われたが[33]，やがてイギリス人の性格やイギリスの福祉厚生制度に深い感銘を受け，イギリスの讃美者になっていく。

(1)　寛容で親切なイギリス人

或る日曜日，セント・ポール大聖堂に観光に出かけたカンバルポーシュは，イギリス人が余所者に対して寛大であることに感嘆させられる。インドのムスリムやヒンドゥーの狭量さを批判しつつ，彼は次のようにイギリス人を称賛している。

「日曜日，観光に出かけた。セント・ポール寺院に行った。千年も前の建物であるが，今なお昔と変わらぬ姿で建っている。インドにいるときから見たいと思っていた。行ってみると，多くのイギリス人やキリスト教聖職者たちが礼拝のために集まっていた。ターバンを被っていたので中に入るのは躊躇されたが，恐る恐る歩を進めた。礼拝を見た。すると棒を手にした守衛が寄ってきて，『外国の方のようだが』と言った。『その通り』と答えると，とても親切にしてくれた。地位の高い人たちが坐っている高い場所に連れて行ってくれ，坐らせてくれた。そこからは礼拝がよく見えた。(…) イギリス人の素晴らしい見識。私のような見ず知らずの余所者を自分たちと同じところに坐らせ，宗教の違いを問題にしなかった。モスクやヒンドゥーの寺院には余所者は入れない。しかしイギリスの人々は支配権，権力を持ちながらも余所者を気にしたりはしない。ターバンを巻いて教会に行くのはキリスト教では大変な非礼である。私はターバンのまま入ったが，誰も『何たる振舞いか』とは言わなかった。このように寛容な人たちに神は高い地位をお与えにならないであろうか。」(pp.66–67)

---

33) カンバルポーシュがロンドンやその周辺以外に観察することのできた西洋の街は，パリ，ビーゴ，リスボンである。「その建物はタージ・ビービーの廟（タージ・マハル）よりもはるかに素晴らしかった。ロンドンやインドの建物よりはるかに美しかった。もはや如何なる王も，このような建物を建てることはできない。この建物は要するに，大地の指輪に嵌められた宝石のようなものであり，地上の天国である」(pp.96–97) と，ヴェルサイユ宮殿には感嘆の声を挙げているものの，ロンドン以外の街は否定的に記述されている。たとえば，パリの街は次のように描写されている。「学芸の地，美の鉱脈，フランスの首都パリは大いに賑わっている（「大いに」が転記漏れ）。薔薇園のような外国の街であるが，道や商店街はロンドンとは異なっている。ロンドンの道は両側が高く，中央が低くなっている。両側の高くなったところは人が往来し，中央の低いところは動物や乗り物が通る。パリでは道は平坦で，人と動物の通る道に区別はない。雨季にはでこぼこした敷石のために道は往来できなくなってしまう。足が滑り，人や動物は倒れてしまうのである。しかし，フィリップ（Luis-Philippe r. 1830–1948）王は，王座に就いてから，道の建設に力を入れている。以前，ランプやランタンで照明されていたところは，今はガスが灯されている（「ガス」の部分が kahīn と誤転記されている。複写では，gēs の語頭が，子音 g を表す文字 gāf ではなく，子音 k を表す文字 kāf になっている）。王は公正な君主で，自国から愚かしい慣習を一掃した。例えば，当地の人々が愛好していた賭博などを王は完全に廃止した。万事に慎重で賢明な王である。王の施策で道もロンドンのようになってきている。」(pp.99–100) インドの街はボンベイとカルカッタとを除いて，きわめて否定的に記述されている。この街をどう思うかとベナレスの人に聞かれたカンバルポーシュは，こう答えている。「私は答えた，『イギリスはこの世の楽園であり，この街，これらの建物はイギリスの便所である。この雑然とした街をイギリスと比較できようか。大違いである。イギリスは広々としていて，楽園のようである。もしイギリスがこのように狭苦しく，悪臭芬々であったら，イギリス人は生きてはいられないであろう』。」(p.166)

カンバルポーシュのロンドンでの生活は，快適なものであったようで[34]，「ロンドンはなんと素晴らしい街であろうか。ここの人々は父親が自分の息子に対してすらできないようなことをしてくれる。様々な街を旅したが，これほど親切な人たちには出会ったことがない」(p.74) と，ロンドンの人たちを称賛している。カンバルポーシュによれば，イギリス本国にいるイギリス人は，インドにいるイギリス人とは全く異なっているである[35]。

「インドに来るとイギリス人は性格が変わってしまう。イギリス（本国）の人たちは，このような者たちと何の関係があろうか。土は清浄な世界と何の関係があろうか。」(p.74)

(2) イギリスの福祉厚生制度

カンバルポーシュは，イギリスの充実した福祉厚生制度にも深い感銘を受けている。グリニッジ観光に出かけたカンバルポーシュは，王立の傷病兵病院を見た感想を次のように記している。

「街（グリニッジ）を見た。多くの庭園があり，多くの人がいた。そこの王立の建物は庭園の柘植の木のようであった[36]。白人の船員は公務で負傷すると，給付金を得てそこでのんびりと暮らすのである。素晴らしい料理がテーブルに置かれているのを見た。なみなみと注がれたビールのグラスが置かれていた。白人たちは美味しそうに食べ，満足げに坐っていた。イギリスの支配者たちは何と賢明なのであろうかと感心した。兵士が少しでも優れた業績をあげると給付金を与え，兵士は何不自由なく暮らす。主人が部下にこれほど気を遣うのであれば，部下は主人のために命を惜しむであろうか。」(p.65)

カンバルポーシュは，精神病院，孤児の学校，女性更正施設，視覚障害者の学校などにも出かけ，次のように記している。

---

34) 知り合いのイギリス人にいろいろ便宜を図ってもらっているが，どういう知り合いなのか，詳しくは書かれていない。

35) カンバルポーシュは，イギリスの影響下にある地域でのイギリス人の横暴な振舞いに言及し，自重を求めている。「朝，起きてホテルを見ていると，ナイル川の船頭が現れてヒル氏（カイロのホテルのコック。イギリス人であろう）に報酬を要求した。ヒル氏は罵倒して彼を殴った。ビタ一文払わなかった。私は辛くなったが，船頭に味方するのは得策には思えなかった。インドやアラビアなどに行く何人かの冷酷なイギリス人は，理由もなしに人々を苦しめる。イギリス国王を恐れて人々は言うことを聞く。しかし，イギリスの法が支配しているところでは暴虐を振るうことはできない。イギリスでヒル氏が船頭を殴れば，船頭も歯が折れるくらい殴りかえすであろう。しかし，ここではイギリス国王を慮って誰も反抗できない。有徳な者は，権力があろうと決して人を虐げない。無力さゆえに，或いは，支配者を恐れるがゆえに虐待しないというのであれば，それは称賛に値することであろうか。他者を恐れるがゆえの行為に過ぎない。称賛に値する者とは，権力があるのに虐待しない者，否，人が命令に従順であることを神に感謝し，常に謙遜を忘れない者である。」(p.117)

面白いことに，別の箇所でカンバルポーシュは，イギリス人の「口汚さや無慈悲さ」に共感を示している。「かつて私はインドにいるイギリス人たちの口汚さや無慈悲さに心を痛めていたが，旅の体験や人々との遣り取りによって，口汚さや無慈悲さなしには物事を進めることができないということが解った。何百ルピー使おうと，それに見合った成果は得られないのである。」(p.158)

36)「庭園の柘植の木のようであった」 高く，美しかった，ということ。「柘植の木」は，ウルドゥー詩では背の高く，美しい恋人の象徴である。

• 精神病院

「11月23日，ロード大尉の家に行き，彼を誘って精神病院を見に行った。それはロンドンの王が建てさせた建物で，ロンドンでは気が狂った者はその建物に収容される。数階建ての立派な建物で，男女別々に収容されている。治療のために医師が任命されており，治癒した者は自宅に戻される。」（pp. 89–90）

• 孤児の学校

「すぐに外に出て学校に行った。父親のいない少年たちが黄色いズボンを穿いて熱心に勉強していた。必要経費は国王から支払われていた[37]。皆，上流階級の子弟であった。驚くほど有能で勉学に励んでおり，心の中で私は素晴らしいと叫んだ。インドの少年たちは，両親が説教しても勉学には決して励まず，無為に時間を過ごしている。それどころか幼いうちから両親に暴言を吐いたり，両親の前で水煙草を吸ったり，よからぬことをしている。彼らはこのような振舞いこそが青春であると考えて楽しんでいる。」（pp. 90–91）

• 女性更正施設

「別の建物に行った。そこには王の政府によって任命された助言者やキリスト教聖職者がいた。不品行を改め，悪行を悔い改めた女性がここに来て，『悔い改めます。もう罪を犯したりは致しません』と言えば，そこに住む場所が与えられる。教育が与えられる。王の政府によってその女性のために幾ばくかの給付金が支給される。正道に就けば，結婚の面倒も見てもらえるのである。」（p. 91）

• 視覚障害者の学校

「別の学校もあった。目の見えない少年たちがいた。衣食の世話は政府がしていた。キリスト教聖職者たちが身振り手振りで教育に当たり[38]，礼拝の仕方を教えていた。」（p. 91）

• 非嫡出児の学校

「娼婦の生んだ少年や非嫡出の少年たちの学校もあった。政府が少年たちを育てるのである。物心つくと教育が与えられる。卒業すると王の従僕となる。」（p. 91）

カンバルポーシュは施設を見た後，次のような感想を述べている。

「このようなことにどれほど利益があるか，理性のある者はじっくり考えてみるとよい。何事においてもこれほど考えられた制度があれば，どうして問題など生じようか。このような人々が世界を支配しないことがあるであろうか。インドでは誰も他人のことを気にかけない。王は国民のことを考えない。女性が不品行なことをすれば，一生，そのような状態にあり，正道に戻るように誰も説得しない。孤児がいても誰も食べ物や衣服を与えない，教育も与え

37）「必要経費は国王から支払われていた。」の部分，転記漏れ。

38）「身振り手振りで（ishārē sē）」とあるので，聴覚障害者もいたのであろう。

ない。このようなことで秩序などあり得ようか，国の運営がまともに行えようか。イギリス人の理性は素晴らしい。何と見事な事業を始めたことか。自国のどの少年も無学，無技能なままには放っておかず，各人に生活手段を提供しているのである。私がロンドン（の施設）について上に書いたこと，それらは称賛に値する。」（p.91）

（3） 知識を求め，時間を無駄にしないイギリス人支配層

カンバルポーシュは，知識や時間に対する態度がイギリス人支配層とインド人支配層とでは全く異なるとも指摘し，次のように前者を称賛するとともに後者を批判している。

「イギリスの人たちは素晴らしい理性，知性をもっており，富があるにもかかわらず，常に知識，技術を求めている。時間をまったく無駄にせず，新奇な物を常に追い求めている。新しいことを発見し，それを世界の人々，後進的な人たちに示している。そうすることによってインドのような国を支配下に置き，さらに征服を続けている。ああ，インドの有力者たちの有様ときたら[39]—彼らは人生を無駄にしている。ハト，ニワトリ，ウズラそして賭け事に夢中になり[40]，現世にも来世にも無知である。追従者が彼らを囲んでおべっかを使っている。彼らは学芸を学ぼうとせず，無益なことに関心を示す。このために彼らは没落の一途を辿っている。イギリス人はその優れた才覚によって彼らを圧倒している。かつてイギリス人が支配していたのは，イギリスだけであった。今や彼らは，その才能によってどれほどの国を支配するようになったことであろうか。インドの王はかつてカーブル，カンダハールまで支配していたが，今や無能ゆえにチェスのキングのように自分の館ですら無力である。」（pp.130–131）

知識を求め，時間を無駄にしないというイギリス人支配層の精神が形成された原因を，カンバルポーシュは次のように教育に求めている。

「かの国（イギリス）の体制では，子供は生まれると，青年期になるまで乳母に預けられる。清潔さが保たれ，汚れて臭くなった布一枚，その傍には置かない。花園のような学校には白い敷物が敷かれている。清潔な服を着せて学習させる。何千ルピーも使う。大切に育て，能力をさらに身に付けさせるために（上級の）学校に送る。ここでも何千ルピーも教育などのために使う。卒業すると王の僕として100ルピー程度の低い職に就く。次第に昇進して高い地位に就く。富がなければどうして教育に出費などできようか。かの国の老いも若きも非常に慎み深く，若者は賢く，祖先の財産を誇ることなく，一般庶民同様，大いに努力して知

39）「ああ，インドの有力者たちの有様ときたら」の「の有様」の部分，転記漏れ。

40）ハトのレースやニワトリ，ウズラを戦わせる競技は当時インドで人気のあった娯楽である。

識，技術を獲得している。父親は彼らのそのような点に大いに満足している。」（p.167）

このようなイギリスに対して，インドでは教育が全く無視されているとカンバルポーシュは嘆く―

「インドの若者たちは父親の財産を鼻にかけている。女たちの許で時間を無駄にし，父親亡き後，どのようにして生活していくか，どのように自分の人生を切り開いてゆくか，考えもしない。奇妙なことに，父親は息子の遊蕩を見て，その行く末を案ずることなく，悦んでいる。立腹するどころか，忠告すらしないのである。」（p.167）

以上のように，カンバルポーシュは，他人に関心を持ち，福祉厚生制度を充実させているイギリス人と他人に無関心なインド人，時間を無駄にせず，知識を求めるイギリス人支配層と，時間を無駄にし，知識を求めないインド人支配層，という具合にイギリス人とインド人と対照的に描き，前者を礼賛し，後者を批判する。インドがイギリスに支配されるに至ったのは単なる軍事力の差ではなく，精神性や制度の差であるとカンバルポーシュは感じていたものと思われる[41]。

カンバルポーシュの旅行記には，イギリスにも賭け事に夢中になる者がいること，男女関係に乱れが見られることが記述されているが[42]，随所で見られるのはイギリス人を賛美する記述である。他者を思い遣ることを第一に考える「ソロモンの教え」を信奉するカンバルポーシュにとって，他者に寛容，親切で，福祉厚生制度の充実したイギリスは，理想的な国と認識されていたのであろう。

41）ウーリッチ（Woolwich）の大砲工廠を見学したカンバルポーシュは，次のような感想を漏らしている。「このように合理的で，ずっとこの作業に従事している人たちが世界の支配者にならないことがあろうか。彼らと争うことは魔物（ジン）と争うことである。別棟に砲兵隊の備品が置いてあった。馬の鞍，手綱，革製品がきちんと保管してあった。必要が生じれば，2万門の大砲が馬とともに2時間で準備できる。インドでは道具は無造作に置かれており，虫がたかっている。必要な時が来て係員を招集しても，騒ぐだけで何もできないのである。」（p.76）

42）ロンドンの遊技場を見て，カンバルポーシュは次のような感想を漏らしている。「夕方，見物に行った。ビリヤードをするためのテーブルがあり，多くのイギリス人がチェスやビリヤードに夢中になっていた。（…）しばらく見ていたが，面白いとは思えず，外に出た。時間が浪費されていることを嘆かわしく思った。何と愚かな人たちであろうか，貴重な時間を馬鹿げたことに使うとは。」（p.73）「外国（vilāyat イギリスを意味していると思われる）の事物や慣習は素晴らしい。しかし道理に反している慣習もある。その一つは夫婦関係に関することである。公正な目で見てみるがよい―夫は非常な苦労をして生活の糧を得ており（「非常な苦労をして」の部分，bah hazār miḥnat-o-mashaqqat の mashaqqat が shafqat と誤転記されている），親への義務―それ以上の義務はない―を忘れ，心から妻の機嫌をとっているのに，大変残念なことに妻は他の男性と付き合い，夫の名誉を台無しにしているのである。人妻を寝取る男など呪われるがよい。夫以外の男と寝る女は辱められるがよい。この国のこの風俗は，私の性に合わなかった。それは醜聞と悪徳にまみれているのである。」（p.101）別の箇所でカンバルポーシュは，パリでショーを見たときの体験をこう記している。「そこに行って我々は見世物に釘付けになった。二人の女性が見事に踊り，歌った。あまりに見事であったのでみな陶然となった。しかし私は一つのことが気に入らなかった。彼女たちは薄い絹の衣服を身に付けて踊るので，体が，隠すべきところが，はっきりと見えていたのである。踊って足を上げるとき，その隠しどころを人々に見せるのである。男も女もみなそれを見る。このようなはしたない行為をはしたないとは思っていない。まったく理に反することであると思えた。聞いたところによると，多くのイギリス人は，インドの商売女たちが露出度の高い衣服，薄く，体にぴったりとした衣服を着ているのを嫌い，彼女たちの歌を聴いたりしないということである。しかし，かの地ではそれを禁止する者は一人もいないのである。」（p.94）カンバルポーシュは，以上のような嫌悪感や不満を持っていたが，それらは肯定的な西洋評価を覆すほど強くはなかった。

おわりに

カンバルポーシュは記録性を重視し，見聞したことを，当時急速に発展しつつあったウルドゥー散文を用いて旅行記に詳しく記した。従って，彼の旅行記は，第1に，当時の旅の様子やイギリス，フランス，エジプト[43)]等のみならず，インド国内の状況を知ることのできる資料として，第2に，19世紀のウルドゥー散文の特徴を知るための資料として評価されなければならない。カンバルポーシュは改革者ではなかったが，日頃，インド社会の在り方に不満を抱いていたのであろう，一般の旅行者とは異なった社会的な関心を持って外国やインドを観察し，その観察に基づいて彼なりの興味深い宗教論，文化論を展開している。このため，本書の内容は単なる旅行記の枠を超えたものとなっており，その影響範囲は不明であるが，思想的にも重要な文献であると言わなければならないであろう。

43) イギリスからの帰路，カンバルポーシュは，ムハンマド・アリー（Muḥammad ʻAlī r. 1805–1848）統治下のエジプトに立ち寄っているが，「王（原文では，「王」を意味する shāh という語が用いられている。ムハンマド・アリーは公的にはオスマン朝のエジプト総督）は各地に学校を建て，学者や学生への月給を定めた。多くの若者を雇い，イギリスやフランスに航海術を学ばせるために派遣した。このように多くの善行を王は自らの手で行った。いくつかの点で王は称賛に値するが，いくつかの圧政により非難に値する」（pp. 121–122）と記し，ムスリムの政権であるからと言って手放しで称賛することはなく，次のように，その人々を苦しめる非道な統治を厳しく批判している。「誰も国王の軍隊で働くことを喜ばない。エジプトの王は無理矢理徴兵している。傷つけられたり殺されたりするのではないか，報酬が少ないのではないかと思って，人々は自分の子供を傷つける。徴兵されないよう，目や歯を傷つけるのである。徴兵されると，兵士の右腕に王の命令で焼印が入れられる。そして一生，働かされるのである。両親や親類は会いに行くことができない。兵舎は豚小屋同然で，土と煉瓦でできている。部屋には一人しか入れず，真っ直ぐに立つことができない。食事はというと，夕方，肉と米のスープが出されるだけである。それは盆で出されるが，一つの盆で数人が食べなければならない。何とひどい勤めであろうか。川や井戸に飛び込んで死んだ方がましである。無理矢理人を徴用し，ひどい目に会わせるのは威光ある国王のすることではないと思われる。」（p. 114）「船はムハンマディー運河（Nahr-e Muḥammadī マフムーディーヤ運河の誤記）を進んだ。昔からあった運河のように思われたが，ムハンマド・シャーがその統治時代に掘らせた運河であった。男性，女性を強制徴用し，運河工事に当たらせたのである。7日間でアレクサンドリアからムハンマディーまで運河が掘られた（マフムーディーヤ運河は，1817年に開削が開始され，1820年に完成した。山口直彦，『新版 エジプト近現代史』，明石書店，2011年，89頁）。24コースの距離である。昼夜を問わない，この重労働のせいで6万人もの人が死んだ。今，この運河を船が往来している。運河沿いの町の側の荒れ果てた村は，アワドを思い出させた。エジプト王の圧政で人々の生活は破壊され，さらに村も荒廃してしまった。端から端まで見たが，耕作地は放棄されていた。役人は耕作させたいと考えているが，役人たちの虐待のせいで耕作は行われていない。エジプト王は万事に賢明であるが，国民を虐げている。」（p. 115）「人々は言った。『エジプト王ムハンマド・アリーは，征服した国の男や女を捕え，給料の代わりに兵士たちに与える。兵士たちは彼らをこの市場に連れてきてあのひどい連中（奴隷商人）に安く売りとばす。連中は一度には売らず，値を釣り上げる。』人々に対してこれほど暴虐を働くとはエジプト王の賢明さからは考えられないことであるが，王は賢明ではあるが，神を恐れていない。これほどの圧政にもかかわらず，どうして王国は保たれているのであろうか。神は苦しめられた者たちの訴えを最後にはお聞きになるであろう。これらの悪行ゆえに彼の国を滅ぼされることであろう。」（p. 119）カンバルポーシュは，キリスト教徒の政権であるか，ムスリムの政権であるかといった観点からではなく，「ソロモンの教え」に基づき，人に益をなすか，害をなすか，という観点から政権，制度，社会を判断していたと思われる。